



お地蔵様

佐佐木 邦子

山道を歩いていたら道端にお地蔵様が立っていた。林の陰になったお寺は表からは見えない。そこがお寺の門前だとも気付かなかった。小さな集落と、集落を通る細い道と、道がゆるくカーブするあたりから始まる急な石段。ススキの穂が小さく揺れる。真新しいよだれかけを掛けたお地蔵様が六人、ススキの陰でひっそりお喋りしているように見えた。

初めての道なのに、よく知っている、懐かしい風景だった。雨ざらしだから、よだれかけはすぐに色褪せる。それを取り替えるのはお寺の人ではなく、近所のおばあさんなのだそう。孫に声をかけるように「お彼岸だからきれいにしようね」などと声をかけ、汚れたよだれかけを脱がせて新しいものと取り替えていく。

地蔵菩薩というのだから、偉い菩薩様である。同じ菩薩様でも、観世音菩薩や勢至菩薩がよだれかけをしているのは、見たことがない。菩薩様に幼児のようなよだれかけを掛けるのは、ちょっと遠慮があるのかもしれない。それなのにお地蔵様だけが掛けているのは、それだけ人に親しまれ、暮らしのそばにいるからだろう。

お地蔵様は子供と遊ぶのが好きらしい。仙台市中野の子育て地蔵様はもとは木でできていたそう。近所の子供が川へ転がして行って、浮き袋がわりにつかまって川遊びをする。恐れ多いからとお堂を造って安置したところ、病気や事故が急に増えた。子供と楽しく遊んでいたのに、閉じ込められてつまらなくなったお地蔵様のしわざだった。元の場所に戻したところ事故はなくなり、子供も丈夫に育つようになった。その後大雨で流され、石で造り直したとか。

田んぼの代掻きを手伝った「代掻地蔵」、イボを取ってくれる「イボ取り地蔵」、虫歯の痛みをおさえる「身代わり歯痛地蔵」など、いろいろなお地蔵様がいる。

体のどこかが痛いときは、お地蔵様の体の、自分の痛いところと同じ部分をさすると治るといふ。そのほか子供が瘡にかからないようにと体中にあんこを塗られたり、恋人が行ってしまわない願掛けに縄で縛られたり、お地蔵様は大変である。そうかと思えばソバが好きで、坊さんに姿を変えてソバ屋に通ったお地蔵様もいた。

死んだ子供を賽の河原で守ってくれるという伝承から、子供の守り神とされるお地蔵様だが、一方では戦勝や財力獲得などのご利益もあるとか。無縁仏を供養するのもお地蔵様の役目で、亡霊を統率するともいふ。お釈迦様がいなくなって弥勒仏もまだ現れない無仏の世界で、すべてのものを救うのがお地蔵様だ。偉そうな素振りを少しも見せず、幼児がするようなよだれかけをして、静かに笑っている。黙って手を合わせていると、ぎすぎすした今の時間が巻き戻って、子供のころのゆったりした心がよみがえってくる気がする。

2008.10 こもれび第6号